墨田の史跡ガイド

―付隅田川七福神めぐり―

改訂版

52.6
すみだとしょかん

墨田区教育委員会

K291.3

★いちばんあとの日までにおかえしください。

52. 8. 13	
52. 9. 28	
53. 3. 13	
53. 8. -2	
54. 9. 25	
54. 10. -4	
56. 2. 17	
57. 8. 12	

でんわ 612-6048
あずまとしょかん

目次

はじめに……1
地図1……2
1 多聞寺……3
2 木母寺……4
3 隅田川神社……8
4 正福寺……9
地図2……10
5 白鬚神社……11
6 百花園……14
7 長命寺……16
8 弘福寺……19
9 三囲神社……21
10 常泉寺……24
11 牛島神社……25

12 隅田公園……27
地図3……30
13 春慶寺……31
14 桃青寺……32
15 本法寺……34
16 法恩寺……35
地図4……38
17 東京都慰霊堂……39
18 安田庭園……41
19 野見宿弥神社……43
20 回向院……44
21 本所松坂町公園……48
22 要津寺……50
23 弥勒寺……52
隅田川七福神の由来……54

はじめに

昭和五十年三月に「墨田の史跡ガイド」の小冊子を発行したところ、わずか半年あまりで品切れとなり、皆様には、大変ご迷惑を、おかけ致しましたが、今回区民の皆様の再版要求にこたえるべく、ここに一部改訂のうえ発行することになりました。

申すまでもなく自然が都市公害により失われていったように、先人の残した文化的遺産やその足跡のある土地や建造物も、時の流れの中に埋没しようとしています。このような現状の中で、史跡、旧跡への関心は、市街地整備の進むなかで、ますますその高まりを見せております。

現在墨田区内に残されているこれら旧史跡も最近の二度（震災、戦災）にわたる災害を経て、なお今日、新しい都市改造の波に洗われております。

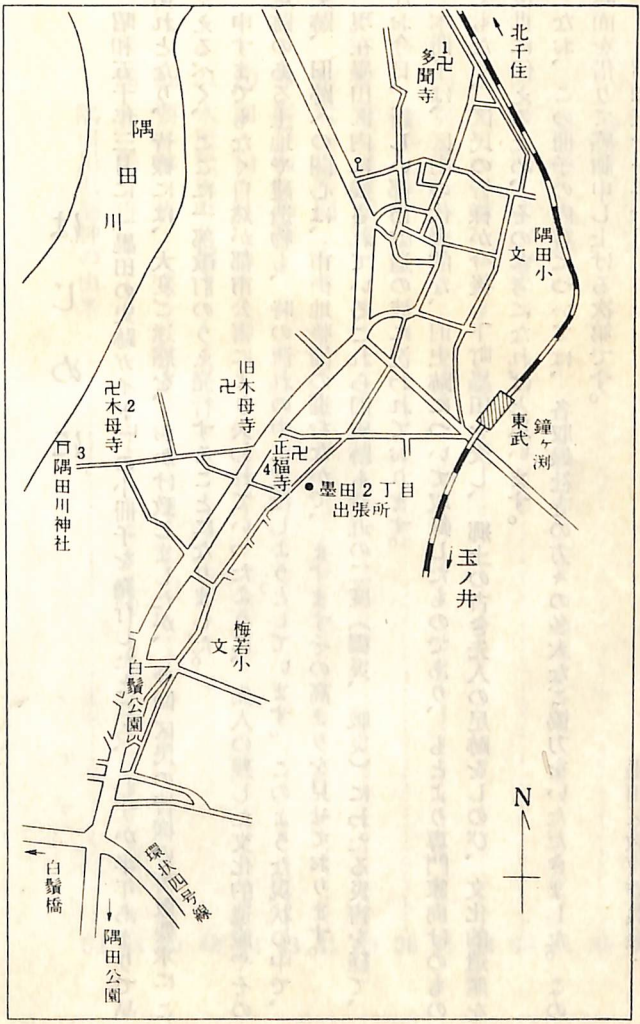
本冊子は、区内の代表的な、旧史跡について収録したものであり、もとより専門家向けのものでもなく、区民の皆様が今後も下町墨田を愛し、郷土の古き先人の足跡をしのび、文化的遺産を後世に伝えるため、その参考になればと思います。

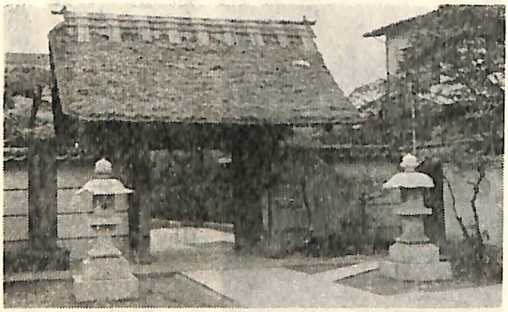
なお、この冊子の内容については、各収録社寺の方々の多大なご協力をいただきました。この誌面を借りて感謝申し上げる次第です。

昭和五十一年十月

墨田区教育委員会

地図1


北千住
1 卍 多聞寺
隅田小文
隅田川
東武
鐘ヶ渕
旧木母寺 卍
2 卍 木母寺
3 卍 隅田川神社
4 卍 正福寺
墨田2丁目出張所
玉ノ井
梅若小文
白鬚公園
環状四号線
白鬚橋
隅田公園
N



多聞寺山門

1 多聞寺（地図1）

所在　墨田区墨田五丁目三一番

古くは吉祥院と号していた新義真言宗の寺院で、東向島蓮花寺末である。慶長一一年（一六〇六）の創建で、開山は実円法印、本尊の昆沙門天は弘法大師の作と伝えられているが、真否は明らかではない。「寺社書上」には「作者年代等不詳」と記されている。

山門は慶安二年一一月一六日（一六四九）良賢法印によって建造された木造茅葺の四足門であるが、享保三年二月（一七一八）焼失した。後に再建、明治三五年から三七年にかけて大修繕がほどこされた。

前庭の案内碑は、縦一六〇cm、横一二〇cmの自然石で、碑面には「隅田川七福神之内昆沙門天、正二位子爵榎本武揚」裏に「明治四一年七月」とある。

なお、境内には狸塚があるが、往昔、この寺内に住むいたずら狸が昆沙門天にこらしめられて死んだのを葬ったと伝えられる。

2　木母寺（地図1）

所在　墨田区堤通二丁目二三番

慈恵大師を本尊とし、天台宗に属する。平安中期の貞元元年（九七六）忠円阿闍梨によって創建されたと伝えられている。

木母寺は建久元年（一一九〇）に源頼朝が奥州征討に際して祈願したと云われ、また長禄三年（一四五九）太田道灌の堂舎改修があったとも伝えられている。古くは梅若寺と言い、隅田院とも称していた。梅柳山の山号は、徳川家康が天正十八年に訪れた時の命名と言う。現在の木母寺の寺号は、慶安十二年（一六〇六）近衛信尹の定めたものである。

明治維新後は廃寺となって、梅若神社となっていたが、明治二一年（一八八八）に光円僧正によって再興された。

現在の境内は、白鬚地区防災処点計画等のために昭和五一年に移転したものである。

梅若塚

① 梅若塚

梅若伝説といわれる悲話は、謡曲「隅田川」、浄瑠璃「隅田川」、長唄「八重霞賎機帯」などにうたわれたり、江戸時代に多くの戯作や小説にもなって、広く人々に伝えられている。

今から約一千年ほど昔、京都の公家、吉田少将惟房の子「梅若丸」は信夫藤太という人買いにだまされ、東国につれてこられた。途中で病気になった梅若丸は、隅田川のほとりにたどりついたものの、「たずね来てとはばこたへよ都鳥すみだ河原の露と消えぬと」という一首を残して、貞元元年三月一五日十二才で世を去った。里人が梅若丸の死をいたんでいる時来あわせたのが天台宗の高僧忠円阿闍梨で、遺言によって塚を築き、柳を植えてしるしとした。それがこの梅若塚と伝えられている。

梅若丸をたずねて翌年この地に来た母は、塚に小さな堂を建て、剃髪して妙亀尼と称して仏道にはいり、梅若丸の後世を弔った。その後、妙亀尼は、「かくばかり我おもかげのかはりけり浅じが池の水かがみ見て」の一首を残して、浅茅ヶ原（台東区）の池に身を投じた。梅若塚の小堂には、忠円阿闍梨がとどまり、梅若寺と名づけて、母子の追福を祈った。現在寺とともに移転し鞘堂に保護されている。

② 榎本武揚像（昭・51・6現在旧位置）

明治中期の政治家。天保七年（一八三六）江戸に生まれる。徳川家の臣、榎本園兵衛の次子で、通称釜次郎、号を梁川といった。幼いとき田辺石奄、友野雄介らに儒学を修め、十二才で昌平黌にはいり、才名が高かった。嘉永六年長崎の海軍練習所で蒸汽機関学等を修め、安政五年江戸に帰り、海軍操練所教授に抜てきされた。その後オランダに留学し、帰国後海軍奉行となる。幕府が崩壊するや、旧幕府の軍艦開陽、回天などで艦隊を編成して北海道に向かい、五稜廓に拠り官軍に抵抗したが、黒田清隆のすすめに従い投降し、獄に投ぜられた。後、許されて明治七年には海軍中将となり、海軍卿を経て外交舞台に活躍した。さらに農商務大臣、枢密顧問官、外務大臣の要職を歴任した。晩年は向島の地に住んで、木母寺のあるこの辺まで乗馬で散歩する姿が見られた。明治四一年（一九〇八）七三才で没した。この像は、大正二年五月に建立され、昭和四一年二月に破損箇所を修復したものである。

③ 三遊塚（昭和51・6現在旧位置）

初代三遊亭円生、二代円生を記念して建てられたもので、高さ三三六センチ、底部一一九センチという大きな自然石である。碑の表面には、「三遊塚　誠手山口正宇お書」、裏面に「泥舟逸人書　為先師三遊亭円生翁追福建之　明治廿二年三月二十一日　三遊亭円歌並門人」とある。泥

舟逸人とは勝海舟、山岡鉄舟とともに幕末の三舟と呼ばれた人物である。

なお、初代三遊亭円生（一七六九～一八三八）は、三遊派の元祖で江戸の人、馬喰町附木店に住み、俳名を円里といった。二代目は門人円蔵が継いだ。

④ 天下之糸平の碑（昭和51・6現在旧位置）

天下の糸平、本名を田中平八といい、幕末に横浜で事業をおこす一方、志士として活躍した。碑の高さは五メートル余という巨大なものである。明治二四年六月の建立で、「天下之糸平」は伯爵伊藤博文が揮毫し、裏面の伝記は子爵杉孫七郎の撰ならびに書である。

3　隅田川神社（地図1）

所在　墨田区堤通二丁目二三番

昔から隅田川総鎮守として水神社または浮島神社の旧号がある。この社のある隅田川東側の地を水神岡あるいは、浮島と称した。一説には、言問の岡ともいったという。在五中将業平の故事にちなんでいうのである。その後土地が開けて駅舎をなし、天徳の頃（一〇世紀中葉）付近が栄えて隅田千軒宿といったと伝えられる。

治承四年（一一八〇）源頼朝がこの駅に到着し、水神の霊験を感じて社殿を造営したといい、また南方三〇間（約六〇m）の地に頼朝橋を架したとも伝えている。なお、この時川中に大亀が浮かび、この上に水神が出現したまい、別当奉拝して尊影を写したという。明治維新までの別当寺は隅田山多聞寺であった。

祭神は速秋津比古神・速秋津比売神・鳥之石楠船神・大楫木戸姫神を主神とし、相殿に水波之売神・御井鳴雷神をまつっている。

4　正福寺（地図1）

所在　墨田区墨田一丁目六番

新義真言宗で、蓮花寺の末寺である。慶長七年（一六〇二）の創建、宥盛法印の開山である。門前に首塚がある。これは天保四年（一八三三）洪水の危険から守るため、橋場村あたりの荒川の河床をさらったところ、たくさんの人間の髑髏が出てきた。工事にあたった人々は、正福寺第一六世宥性和尚とはかってこれを合葬したのが、首塚と呼ばれた。「首から上の病」にご利益があると信仰されている。

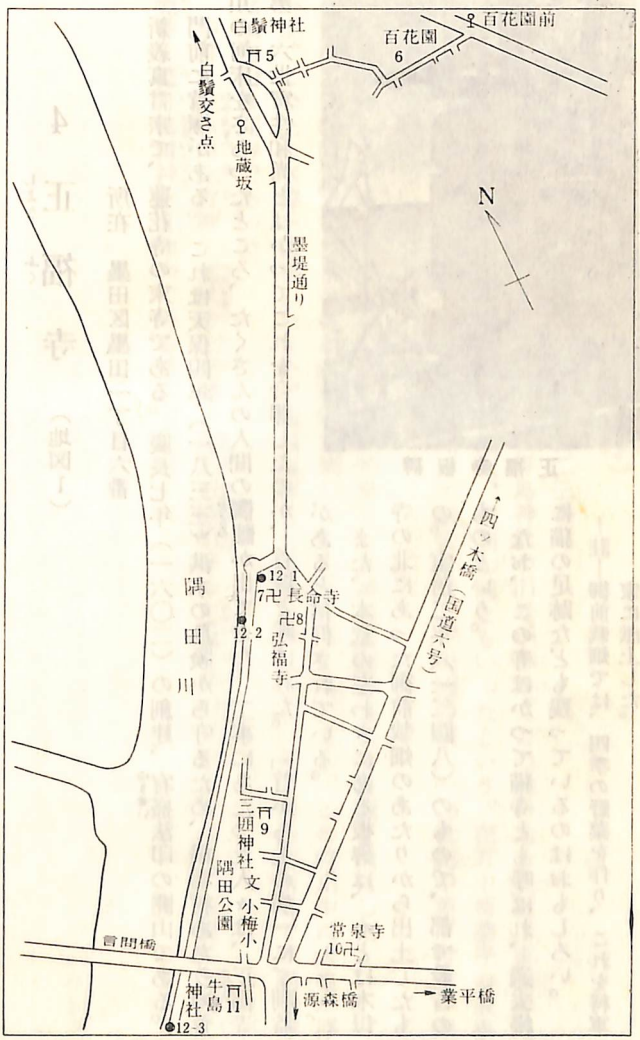
正福寺板碑

また、本堂の左わきにある板碑は、もとは木母寺の北にあった御前栽畑のあたりから出土したもの。宝治二年（一二四八）のもので、都で最古のものという。

なお、この寺はかつて猫寺とも呼ばれ、過去帳に猫の足跡なども残っているのはおもしろい。

―註―御前栽畑では、四季の野菜を作り、これを将軍家に献上した。

地図2


白鬚神社
百花園前
百花園
6
白鬚交さ点
地蔵坂
墨堤通り
N
四ツ木橋
(国道六号)
隅田川
12 1
7卍 長命寺
卍8
12 2
弘福寺
9
三囲神社
文小梅小
隅田公園
常泉寺
10卍
言問橋
11
牛島神社
12-3
源森橋
業平橋

5 白鬚神社（地図2）

白鬚神社

所在　墨田区東向島三丁目五番

祭神は猿田彦大神を主神とし、合殿に天照大御神・高皇産霊神・神皇産霊神・大宮能売神・登由宇気神をまつり、明治四〇年に同社南の諏訪神社を合祭して祭神健御名方神を合わせまつっている。

社伝によれば、草創は天暦五年（九五一）慈恵大師すなわち元三大師が関東下向に際し、近江国志賀郡境打颪に鎮座する白鬚大明神を勧請したものという。昔は境内に松、けやき等が多く、白鬚の森といわれ、向島八景、隅田川二十四景に数えられていた。

現在の社殿は元治元年（一八六四）に造営されたもので、都内では古い建物である。ただ、瓦葺が銅葺に変っている。

① 岩瀬鷗所の墓碑

江戸時代末期の外交家。文政元年（一八一八）江戸に生まれ、幼名を篤三郎、修理、後に忠震といった。号は、隅田川の辺に住んだので鷗所と称した。

幕府の徒頭、設楽貞夫の第三子で、天保十一年旗本岩瀬忠正の養子になった。嘉永二年、老中阿部正弘から目付に抜てきされた。目付というのは禄位は高くはないが、極めて権威のあった職柄で、老中はじめ三奉行でも目付の同意がなければ事を決行することができなかった。なお、父より上の官職につくというのも例外であった。

鷗所は聖堂に漢学を学び、外国の事情認識は、その頃第一といわれ、幕府の鎖国政策を非難した。また砲台を築き、軍艦を造り、講武所と蕃書調所を設け、海軍伝習を始めるのに参画した。時に将軍家定の継嗣選定の問題が起こり、新任の大老井伊直弼と対立したため左遷され、安政六年八月譴責を蒙って官位を奪われ、蟄居を命ぜられた。

その後、向島に隠居し、もっぱら読書文芸にふける悠々自適の生活を送り、文久元年（一八六一）七月喀血して四四才で没した。

② 鷲津毅堂碑

文政八年（一八二五）尾張に生まれる。通称九歳、毅堂または蘇洲と号し、父、祖父ともに文

学をもって一郷に徳望があった。

二十才の頃江戸に出て昌平黌に学び、嘉永六年久留米藩に仕え、ついで尾張侯の招きに応じ侍講となり、さらに教授に進み、毅堂自身も子弟とともに学問に励んだ。

時に王政復古となり、藩主徳川慶勝の議定官に任ぜられ、国論を一定し、勤王の思想を隣藩にまで広めた。

明治元年朝廷より権弁事を拝し、同二年大学少丞に転じ、権大法官五等判事、司法少書記官、東京学士会々員に列するなど明治政府の要職を歴任した。明治一五年司法大書記官に任ぜられ、同年一〇月五日、五十八才で没した。なお、毅堂は永井荷風の母方の祖父にあたる。

6 百花園（地図2）

福禄寿堂

所在　墨田区東向島三丁目一八番

はじめて百花園を造ったのは、仙台生まれの商人平八で、文化元年（一八〇四）のことである。

平八は、天明年間（一七八一～八）江戸に来てこっとう店を営み、北野屋平兵衛と称した。世才、文才にたけ、当時の文化人である加藤千蔭・村田春海・亀田鵬斎・大窪詩仏・太田南畝・酒井抱一などに愛顧を受けて産をなした。やがて本所中之郷に居を定めて菊屋宇兵衛と改め、鞠塢（きくう）と号し、寺島村の多賀屋敷跡三千坪（一万㎡）を買い求めて花園を開いた。園内に天神様の小堂を建て、愛顧を受けた文人墨客に梅樹の寄付を求め、たちまち三六〇本余りを得た。

百花園の名は、「梅は百花のさきがけ」という意

味で、酒井抱一が命名したという。そのほかに花屋舗、新梅屋敷、七草園、菊塢亭などの呼び名がある。

その後、宮城野萩や筑波萩などの秋草をはじめ、しだいに草木の数をふやし、一年を通じて花をきらすことがないまでになった。蜀山人が「花屋舗」の三字を題すれば、詩仏が左右の柱に「春夏秋冬花不断、東西南北客争来」の聯をかけ、千蔭は「お茶をきこしめせ梅干もさむらうそ」のかけ行灯を掲げるなど、一躍百花園の名は遠近に響くにいたった。

文政一二年（一八二九）三月に一一代将軍家斉が、弘化二年（一八四五）一月に一二代将軍家慶が来観したのは、当時として破格といえよう。明治には、榎本武揚、乃木将軍なども来遊、さらに今上天皇、秩父・高松両殿下がお成りになった。また、伊藤博文も韓国皇太子を伴い訪れ、アメリカ大統領タフトも来遊した。ただ、今次の大戦ですべて焼失したが、福禄寿の尊像だけが残り、墨田七福神の一つとして、人々の信仰が厚い。

7　長命寺（地図2）

所在　墨田区向島五丁目四番

天台宗延暦寺の末寺で、古くは宝寿山常泉寺と号していたというが、開山、開基、創建の年などは明らかではない。

長命寺の寺号は、かつて宝樹山常泉寺と称したが、寛永のころ三代将軍家光が墨東の地に鷹狩りに来た時、腹痛となり、この寺の住職が加持した庭中の般若水で薬をのんだら痛みが止まったので、長命寺としたと伝えられている。また一説には、これを徳川家康の事跡とし、当時は名もない小庵であったので、長命寺の寺号を与えたという。寺内には長命水が今もその姿を残している。

古くは境内に弁天堂や芭蕉堂もあった。芭蕉堂は宝暦年中に俳人祇徳が建てた自在庵という庵で、のちに能阿によって再興され、長命寺の芭蕉堂と通称されていたものである。長命寺はまた雪景色の美しさで江戸名所のひとつに数えられていた。「柴の一本」に「十二日初つかた長命寺へ行たるに、さらぬだに人気稀なる古寺に冬かれの野べの気色も淋しく、風まぜにふる雪は見るが内に垣を埋み、窓の呉竹はをれふせたれども、隣を見する家もなし。草木いまだ春ならずして花事うごき、乾坤いまだ夜ならずして月花あらたなり。」とあり、「江戸名所花暦」にも、「長命寺隅田

川の堤曲行の角にあり。境内に芭蕉の碑あり。この辺に佇(たたず)みて左右をかへり見れば、雪の景色いはんかたなし。」と述べられている。

なお、弁財天は隅田川七福神のひとつである。

① 成島柳北の碑

幕末、明治の随筆家、実業家。天保八年（一八三七）江戸に生まれた。一八才のとき、家職をついで侍講に進み、将軍家定、家茂二代に仕えた。慶応元年以来次第に重んぜられ、外国奉行となり、会計副総裁に進み、幕政に加わった。幕府崩壊とともに職を退き隅田川畔の自分の別荘に住んだ。今の言問小学校のあたりである。

明治三年浅草本願寺に学舎を設けて子弟を導いた。同五年本願寺光瑩の外遊に従ってヨーロッパを視察した。明治七年九月、公文通誌が朝野新聞と改題され、紙勢を拡張する機会に社長として迎えられ、雑録欄を担当して時事を風刺し、大いに読者を喜ばせた。また、外遊の折修得した知識を生かして、日本の生命保険制度の草分けである「共済五百名社」の創立に協力している。

明治一七年（一八八四）一一月三十日、四八で没した。この碑は実業家としての柳北の功績を記念し、明治一八年に建立したものである。なお、墓の所在は不明である。

② 芭蕉雪見の句碑

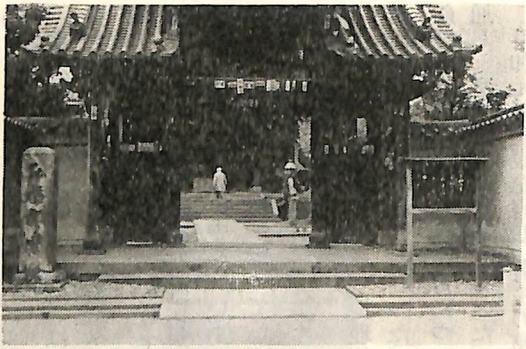
芭蕉の句碑は、全国で一五〇〇余を数えるといわれるが、その中で「いざさらば雪見てころぶ所まで」というこの句碑は、最もすぐれたものの一つである。三世自在庵祇徳が芭蕉の風と徳を慕ってこの句碑を建立した。

③ 橘守部の墓（都指定旧跡）

江戸時代の国学者。通称は北畠源助、号は池庵。天明元年（一七八一）伊勢に生まれる。一七才のとき江戸に出て、一〇年余り芝新銭座または八丁堀に住み、その間はじめて国学に志したが全くの独学であった。二九才のとき武州幸手に移り、四〇才をすぎる頃から安部と称した。四八才の頃、再び江戸浅草弁天山に居を定めた。まもなく「山彦冊子」を刊行して名声をあげ、以来続々と名著を出し、平田篤胤、伴信友、香川景樹らならんで、天保の四大家といわれた。嘉永二年（一八四九）五月二四日、六九才で没し、当寺に葬られた。守部の国学は、本居宣長の学説に対抗する意識をもって成立しているといわれる。すなわち、宣長の「古事記伝」に対し、「日本書紀」神代巻及び「記・紀」の歌謡を訳した「稜威道別」「稜威の言別」があり、「詞の玉の緒」に対し、「助詞本義一覧」などがある。

なお、守部は本所に住したこともあるといわれている。

8 弘福寺（地図3）



弘福寺山門

所在墨田区向島五丁目三番

むかし葛飾郡須田村香盛島と云う僻村にあった香積山弘福寺という堂宇を、延宝元年（一六七三）村の有力者たちのはからいで、黄檗派の寺として、葛西一族の城址に寺地をうけ、ここに移したのが、現在に至っている。開山は鉄牛道機禅師、開基は稲葉美濃守正則で、本尊は釈迦如来像（松雲作）である。

現在の建物は、昭和八年に再建されたものである。（旧伽藍は関東大震災で焼失）黄檗特有の唐風の結構で、本堂両翼にある円窓、堂前の月台、ところどころの柱にかかる聯額など、他の寺院建築にあまり例を見ない。（本山である京都万福寺は、同じような建築様式で、さらに規模が大きい。）なお、本寺には隅田川七福神のうち、「布袋尊」を安置申してある。

① 咳の爺婆尊

風外和尚（寛永年中の人）は、相州真鶴の山中の一洞穴で求道生活をしていたが、同地の岩石をもって、自ら父母の像を刻み、朝夕の孝養を怠らなかった。小田原城主稲葉正則公は、その石像のやさしい姿、見事なでき、さらに和尚の至情に胸打たれこの石像を自分の邸に請い受け供養していた。しかし、同公が転封となるため、菩提所である当寺に寄贈し、祀らせた。人呼んで咳の爺婆尊といい、口中に病いあるものは爺に、咳を病むものは婆に祈り、全快すれば、煎豆に番茶を添え供養する例が伝っている。

② 池田冠山の墓碑

江戸時代末期の儒学者、地理物産学の研究家。明和四年（一七六七）に生まれ、幼名を鉄之丞、恒次郎、のちに定常といった。天明五年家督を継いで因幡若桜藩主となり、従五位下縫殿頭に叙任した。学問は左藤一斉（いっさい）について学び、古今和漢の書、地誌仏典に至るまで、多くの書に目を通し、また諸芸にも通じていた。訪問する者の貴賤を問わず引見し、ねんごろな交りをもった。

享和元年健康を害し、藩主の座を退いた。その後、もっぱら著述を楽しみとし、晩年「冠山道人」と号した。佐伯侯毛利高標、仁正寺侯小橋長昭とならんで文学三侯と称され、天保四年（一八三三）七月九日六九才で没し、当寺に葬られた。著書には「周易管窺」「論語説」「墨水源流」など数多い。

9　三囲（みめぐり）神社　（地図2）

所在　墨田区向島二丁目五番

もと現社地より三、四百メートル北方の田の間にあったところから田中稲荷ともいう。縁起によれば文和年中（一三五二～五五）近江国三井寺の住僧源慶が常に伝教大師の刻んだ延命地蔵を持念していたところ、たまたま夢想に感得して東国にきたり、牛島の辺に壊れた社を認め、その弘法大師由縁のことを聞いて社壇を改築しようとしたとき、土中に白狐にまたがる老翁の像を得、その時白狐が現われて神像を三回まわったところから、三囲の名が起ったという。祭神は宇迦之御魂（うかのみたま）命である。

京都の豪商三井氏が江戸に進出した際、其角雨乞いの霊験に感じて江戸においての三井の守護神と崇め、享保元年に社地の拡張、社殿の造営を行い、以来三井氏の尊崇は今日にも及んでいる。三越の本支店には

三　囲　神　社

当社の分霊を祭っている。

なお、境内にまつってある恵比寿、大国の二神は、隅田川七福神の一として名高い。

① 老翁老嫗の石像

元禄の頃、この三囲稲荷の白狐祠を守る老夫婦がいて、祈願しようとする人が老嫗に頼み、田圃に向って狐を呼んでもらうと、どこからともなく狐が現われて願い事を聞き、またいずれかへ姿を消してしまう。他の人が呼んでもけっして現われることがなかったという。俳人其角はそのありさまを、「早稲酒や狐呼び出す姥が許」と詠んでいる。

老夫婦の没後、里人や信仰者がその徳を慕って老夫婦の石像を建てたと伝えられている。老翁像には、「元禄一四年辛己五月一八日、四野宮大和時永　生国上州安中、居住武州小梅町」。老嫗像には、「大徳芳感」と刻まれている。

② 宗因白露の句碑

文化九年（一八一二）江戸で西山宗因の流れをくむ一陽井、素外らが発起人となり、始祖宗因の中でもっともすぐれた「白露や無分別なる置きどころ」の句を刻んで建立したのがこの碑である。

宗因は慶長一〇年（一六〇五）肥後に生まれ、江戸初期の著名な連歌師、俳人で、連歌では主

に宗因、俳諧では一幽、西翁、梅翁などと称した。後に名を成して、大阪天満宮の連歌界の重鎮となった。俳諧をはじめたのは晩年に近く、それも余技としてであった。句風は、軽妙洒脱、急速に俳壇の人気を集め、談林俳諧勃興の起因となった。

③　雨乞の碑

元禄六年（一六九三）は非常な日照りで困り切った小梅村の農民が、三囲社頭に集まり、鉦や太鼓を打鳴らし、雨乞いをしていた。ちょうど俳人其角が門人の白雲をつれて吉原へ遊びにいく途中三囲社に詣でた。雨乞のありさまを見て、能因法師などの雨乞の故事にならい、「遊うた地や田を見めぐりの神ならば」と詠んだのがこの句である。

其角は、寛文元年（一六六一）江戸に生まれ、姓を榎本のちに宝井と称し、江戸時代中期の俳人で、蕉門第一の高弟として重んぜられ、宝晋斉と号した。自選句集の五之集に「牛島三囲の神前に雨乞をするものにかわりて、夕立や田を見めぐりの神ならば、とうたえば翌日雨降る」と記されている。

なお、現存の句碑は、明治六年再建されたものである。

10 常泉寺（地図2）

所在　墨田区向島三丁目一二番

日蓮正宗で富士大石寺の末寺である。慶長元年（一五九六）二月の創建で、開基は仙樹院日是上人、本尊として安置するのは、大石寺二世日興上人筆「十界互具板本尊」とされる。

七世日顕上人は京都の人で、延宝七年（一六七九）に御水尾天皇第一皇女が徳川家宣へ降嫁の時に随従東下して当寺に入り、また宝永元年（一七〇四）七月二二日に没した家宣の養女政姫（近衛家熙の女、法名本乗院妙融日耀）が当寺に葬られ、さらに宝永七年七月二五日に死去した家宣夫人天英院殿も同寺に葬られた。このような事実によって常泉寺は、「柳営日次記」宝永七年一一月二六日の条によると、寺領三〇石の下付と寺地の増加があったと記されている。

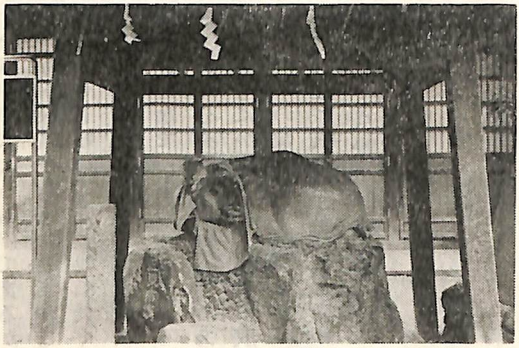
① 朝川善庵の墓（都指定旧跡）

天明元年（一七八一）片山兼山の末子として江戸に生まれた。諱は鼎、字は五鼎、善庵または学古塾と号した。父、兼山が中年で没し、母は遺児四人とともに医家朝川黙翁に嫁した。黙翁は遺児をよく撫育、わけても善庵を愛し、自ら句読を授け、長じては山本北山に学ばせた。江戸本所小梅町で門弟に教授し、嘉永二年二月（一八四九）に六九才で没した。

その主な著書には、「周易愚説」（二巻）「易説家伝旧聞」（四巻）等がある。

11 牛島神社（地図2）

所在　墨田区向島一丁目四番



撫牛

当社は大正十二年の震災までは、墨堤常夜灯の下、大いちょうのある場所にあり、震災後旧水戸邸跡の現社地に移った。

当社は貞観二年（八六〇）に慈覚大師の勧請と伝える。古くは牛御前神社といい、祭神は素盞之雄命、天之穂日命四品貞辰親王命の三柱で、本所総鎮守であり、旧郷社でもある都下屈指の神社である。

牛御前の社号については諸説があるが、「江戸名所図絵」には、牛島の出崎に位置するところから牛島の御崎ととなえたのを御崎を御前と転称したものだろうと説いている。さらに「武蔵志料」は、昔の尊称である大人、主にもとづき、牛島の神がこの地に久しく鎮座する地主の神であるところから、主御前と称したのを牛を借字してあてたもので

牛は獣中の大なるものであるからいわれなきにあらずといっている。

四品貞辰親王をあわせまつることについては、親王は清和天皇の皇子で、藤原氏の専権を避けて当国に下られてこの地に長くとどまられ、近臣がその高徳を追慕してまつったと伝える。

境内に撫牛（なでうし）といって石造の臥牛がある。これは仏寺の御賓頭盧（おびんずる）様と同じように、自分の体の悪い部分をなで、牛の同じところをなでると病気がなおるという信仰で、体だけでなく、心もなおるという心身回癒の祈願物である。また、子どもが生まれたとき、よだれかけを奉納し、これを子どもにかけると、健康に成長するといういい伝えもある。

この牛の像は、牛御前または牛島という神社の名に由来して作られたといわれる。文政八年（一八二五）頃奉納されたといわれる。明治初年の作家、淡島寒月の句に「なで牛の石は涼しき青葉かな」と詠まれているように、撫牛の信仰はかなり古くから知られている。

12 隅田公園（地図2）

所在　墨田区向島一、二、五丁目

関東大震災の結果として、東京市内に数か所の火除地を設置する計画が、当時の復興院でとり上げられた際、名勝史蹟の隅田堤を復興させるため、隅田公園設置案が帝都復興計画に基づいて実施に移され、総工費六八〇万円で大正一四年六月着工、昭和六年三月二三日に完成した。本公園の総面積は約一八七〇〇〇㎡で、本区側は九六七七四㎡である。残り約九万㎡は台東区側の吾妻橋から北、浅草今戸までの隅田川沿岸地域である。

本区側地域内には、旧水戸邸跡があり、芝生、泉水、池等の庭園の一部があり、桜並木も整然として、名所復活を思わせた。然し惜しいかな、墨堤に沿う三〇メートル巾の道路には自動車が疾走し、さらにその上を高速道路が走っている。排気ガスと騒音とに墨堤の情趣など吹き飛んでしまった。

① 墨堤植桜の碑

明治二〇年（一八八七）に建てられたもので、榎本武揚の篆額、浜村大解の撰文となっている。墨堤の桜の由来を記したもので、はじめ将軍吉宗の命で、桜、柳、桃各一五〇本を枕橋から北二一〇〇余間（約三七八〇m）にわたって植樹した。その後、文化年間白鬚神社付近の土堤に佐

原鞠塢が八重桜一五〇本を植樹した。天保二年(一八三一)には坂田三七郎が二〇〇余本を植え、その後安政元年になって二百本を補植した。しかし、弘化三年の大洪水で大部分の桜樹がそこなわれたので、須崎の宇田川総兵衛は、独力で桜樹一五〇本を補植した。

明治に至って其角堂永機、また成島柳北の遺志によって、大倉喜八郎、安田善次郎、川崎八郎右衛門らが出資し、村民協力して桜樹を補植した。これらの功績を永世に伝えるために建てられたものである。

② 常夜灯

明治四年、牛島神社がこの付近にあった頃神社へいく坂の途中に建立された。川船のための灯台で、安全を祈るものであり、墨堤の灯明をかねていた。灯篭を目印に花見客が集まり、ここで一息いれて散策を続けた江戸、明治の風情を回想させるなつかしい遺品である。灯篭に「本所総鎮守」と刻んであることが、本所一円の鎮守神である牛島神社の社格を証明している。

なお、台石に刻んである奉納者の氏名は、本所にゆかりのある人々には、何とも言えない親しみを感じさせるであろう。

③ 正気歌碑

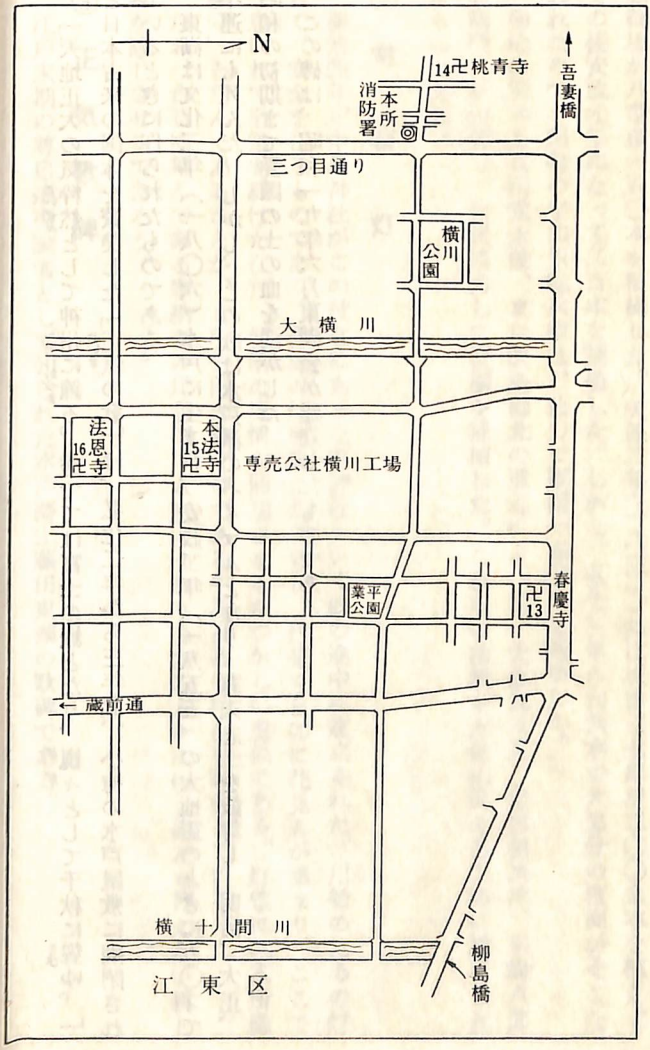
江戸末期の尊皇攘夷論者として知られた水戸藩士藤田東湖の歌碑である。

「天地正大の気粋然として神州に鐘る。秀でては富士の嶽となり、巍々として千秋に聳ゆ。」と日本古来の国体を賛美した「正気の歌」は、弘化二年から三年間、小梅の水戸屋敷に幽閉されているときに作られたものである。

東湖は文化三年（一八〇六）水戸に生まれ、安政二年（一八五五）の大地震のときに五〇才で不運にも死んだ。しかし、この歌は水戸派のバイブルとなり、幕末志士を鼓舞し、明治、大正、昭和の初期まで愛国の士の血を湧かした。

この碑は、昭和一九年六月東湖会が建立したものである。

地図3


N
14卍桃青寺
吾妻橋
本所消防署
三つ目通り
横川公園
大横川
法恩寺 16卍
本法寺 15卍
専売公社横川工場
平業公園
卍13
春慶寺
蔵前通
横十間川
柳島橋
江東区

13 春慶寺（地図3）

所在　墨田区業平二丁目一四番

元和元年（一六一五）に浅草森田町に起立した日蓮宗の寺院で、身延山久遠寺の末寺であり、開山は真如院日理上人である。寛文七年（一六六七）に浅草から現地に移転してきた。寺内は戦災によって大破し、現在は荒廃を極めている。

① 四世鶴屋南北の墓

江戸中期の狂言作者。宝暦五年（一七七五）江戸に生まれた。幼名を勝次郎（一書には伊之助）といい、はじめ、父とともに紺屋の職をしていたが、生来の芝居好きと文才のあったところから安永五年（一七七六）初代桜田治助の門にはいり、桜田兵蔵と称して同六年中村座の「将門冠初雪」に初めてその名を連ねた。

立作者となったのは、享和元年（一八〇一）河原崎座であったといわれているが、頭角をあらわしたのは、文化元年同座の「天竺徳兵衛韓噺」で、尾上松助（後の松緑）の水中早替りの至芸と相俟って、七〇余日の大入り興業を続けた。安永八年に鶴屋南北を襲名し、「お染久松色読販」「東海道四谷怪談」などの傑作を生みだした。文政一二年（一八二九）一一月二七日、七五才で没した。

14 桃青寺（地図3）

所在　墨田区東駒形三丁目一五番

臨済宗妙心寺末で、寛永三年（一六二六）の創建である。開山は法光明幢禅師、二世は黙宗和尚とされているが、事実は黙宗和尚の創建になり、のちに師の明幢禅師を招いて開山としたものといわれる。本尊は十一面観世音であるが、江戸時代には寺内の芭蕉堂によって著名な寺院であった。はじめ定林院と号していたのを、延京二年に寺号を桃青寺としたのも、俳人芭蕉の法号桃青の二字によったもので、芭蕉は当寺に寄宿すること数年に及んだと伝えられている。

芭蕉堂については「葛西志」に、

「客殿に向って右の方にあり。（中略）西行法師及び俳人芭蕉、素堂、馬光、素丸と言うものの木像を安ず。西行は殊に奇古の像なり。」

とある。

①　長谷川馬光の墓

江戸中期の俳人。貞享四年（一六八七）に生まれた。津軽越中守の藩医須田宗入盛直である。幼名を孫太郎といい、後に半左衛門と改め、藤原直行と称した。長谷川直隆に養われ、元禄七

年八才で直隆の後を継ぎ、享保一一年には、西丸の御刀番に列した。

俳諧は、葛飾蕉風の初世其日庵山口素堂に学び、師の其日庵をつぎ二世となったが、点者となり、門戸を張ることをせず、交友は各派に渉っていた。

享保一〇年に中川宗端、松本珪林、大場寥和、佐久間柳居と相謀って、「五色墨」運動を起こし、俳壇の革新に尽したことは有名である。寛保三年、当寺に芭蕉堂を作り、芭蕉、素堂の像を安置した。著書には、「湯山紀行」「藪鶯」「かさね笠」などがある。

寛延四年（一七五一）「振かへる谷の戸もなし郭公」の一句を最後に六五才で没した。

—註— 享保時代の江戸俳壇は、其角の末流と沾徳一派の人々が最も勢力をふるい、宗匠はしきりに点料をむさぼり、作者はただ点者の好みに投じようとして、俳風は乱れ、俳閥の弊も加わった。この状態をうれい相提携して、この弊風革新のために起ったのが五色墨運動である。

15 本法寺（地図3）

所在　墨田区横川一丁目一二番

妙栄山。日蓮宗で京都本国寺の末寺である。文禄四年（一五九五）七月六日、寿明院日慶上人が神田に土地を拝領して創建、後、慶安二年（一六四九）二月谷中に移り、さらにその地が公収されたため、元禄二年（一六八九）正月に当地に移転した。

①　狩野元信の墓

室町時代の画家、狩野家二代目の大家。文明八年（一四七六）京都に生まれた。狩野派の始祖正信の子で、通称四郎次郎といった。

元信は天性絵事を好み、法を家庭に学んだ。十才で将軍足利義政の近侍となり、ついで将軍義澄に仕えた。後に将軍義晴の命により剃髪して法眼となり、永仙、また玉川とも号した。

元信は生まれつきの筆力と不断の修養とをもって、既成諸派の長所を集め、これを融合し、山水、人物、花鳥などを得意とした。柔剛の筆致は南北の二宗を兼ねて、その変化を自在にし、さらに大和絵の手法を加えて、狩野の新風格を大成した。永禄二年（一五五九）一〇月一六日、八四才で没した。

この墓は昭和三〇年一〇月、狩野文氏によって再建されたものである。

16 法恩寺（地図3）

所在　墨田区太平一丁目二六番

法恩寺全景

日蓮宗、京都本圀寺末で、はじめ江戸平河の一小庵であったが、長禄二年（一四五八）江戸城にあった太田道灌が日住上人に助力を与えて堂宇を建立し、上人の院号によって本住院と号し一寺となった。のち大永四年（一五二四）に道灌の孫太田大和守資高が亡父六郎左衛門資康の一三回忌を翌年にひかえ、その追善のため堂宇を営造し、また武州三田郷のうち田畑五〇余貫文を寄進し、資康の法名（法恩斉道源日恵大居士）によって寺号を法恩寺と改め、土地にちなんで平河山の山号を定めたのである。

当時の法恩寺は、江戸の辰巳（たつみ）（南東）に位置して鬼門よけとされていた。徳川家康の江戸入府後の慶長一一年（一六〇六）には江戸城本丸造営のため神田柳原に移り、さらに谷中に移転したのち、元禄元年（一六八八）閏正月、禅

智院日定上人の時に本所の地に移った。このため日定上人を中興の開山とする。

本寺の祖師日蓮上人の木像は、日法上人の作といい、京都本圀寺にあったものを法恩寺創建に際し、日住上人が請い受けたものである。

本堂前の左側には平川清水稲荷大明神と彫られた石柱がある。太田道灌が居城警護のために日蓮宗の霊場を建立して本住院と称した時、平川の地に稲荷大明神を安置して本住院をその別当寺としたが、以後この稲荷は城中平川清水の地に鎮座した。後に法恩寺が谷中に移ってからは同寺の南に清水坂という地名があったために同所に社殿を建立したが、元禄元年には法恩寺とともに本所に移転したのである。

① 太田道灌の墓

室町時代の武将、永享四年（一四三二）相模に生まれた。関東管領扇ケ谷上杉氏の執事資清の子で。歌人としても知られている。幼名を鶴千代磨、源六郎と称し、成人してからは、持資、資長と改め、備中守正五位下まで昇り、剃髪して道灌と号した。

道灌は扇ケ谷上杉定正に仕え、文武両道を修め、康正二年（一四五六）江戸城を築き、ここに住んだ。彼は築城にかけても名手で、さらに川越、岩槻の二城を築いた。

また毎年兵を用い、豊島氏をはじめ、多くの城を攻め破り、数々の武功をおさめた。道灌軍法

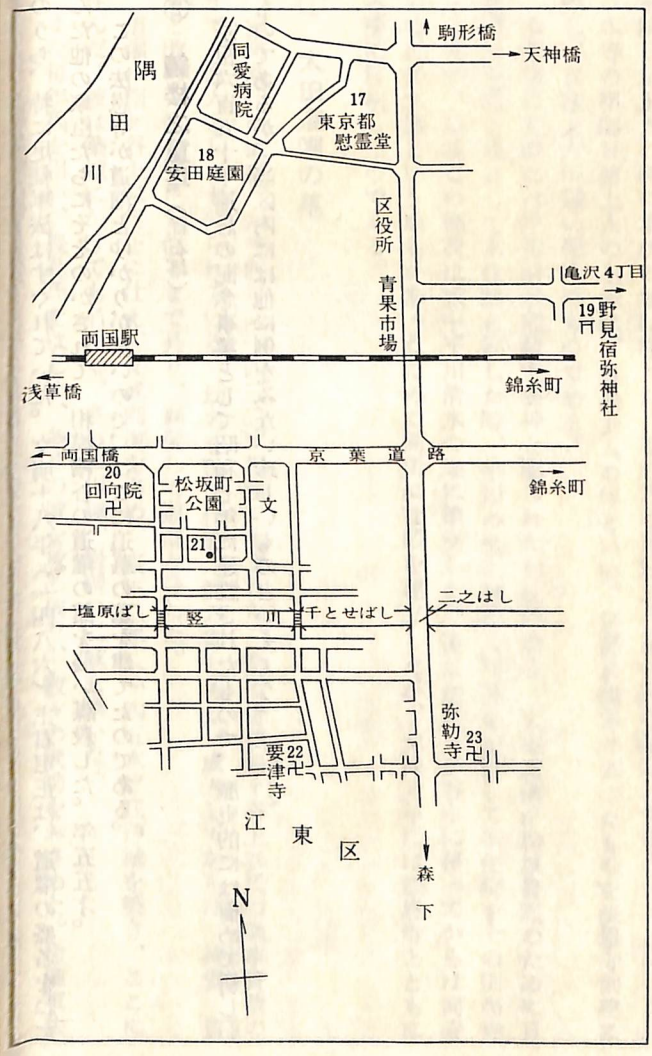
のうち、特に足軽軍法はすぐれていた。文明十八年（一四八六）主君定正は、道灌の盛名をねたんだ他の家臣たちにそそのかされて、相模糟谷の道灌の館を襲い謀殺した。年五五才。

この法恩寺が道灌とゆかりが深いので、ここに追慕の墓を建てたのである。

② 鐘楼之重塔（経石塔）

宗祖六百五十年遠忌の記念事業として昭和七年に建設されたもので、歴史的には極めて新しいものであるが、当区内には他に例をみない珍しいものといえよう。

地図4


駒形橋
天神橋
隅田川
同愛病院
17
東京都慰霊堂
18
安田庭園
区役所
青果市場
亀沢4丁目
19
野見宿弥神社
両国駅
浅草橋
錦糸町
両国橋
京葉道路
20
回向院
松坂町公園
文
21
錦糸町
一塩原ばし
竪川
千とせばし
二之はし
弥勒寺
23
要津寺
22
江東区
森下
N

17　東京都慰霊堂　（地図4）

東京都慰霊堂

所在　墨田区横網二丁目三番

この地は陸軍被服本廠跡で、約六六〇〇〇㎡（約二万坪）あったが、東京市がここに公園、区役所、その他社会事業用地を建設するため陸軍省から買収し、大正一二年七月、横網公園の築造工事に着手した。ところが同年九月一日の関東大震災によって、ここに避難した人たちのうち四万にのぼる犠牲者がでた。そこで市ではこれらの遺骨と市内各所で火葬した遺骨を合わせた五万八千人の遺骨を、悲惨を極めたこの地に安置することにして、一〇月、仮納骨堂を現在の慰霊堂の中心付近に建設した。（後、慰霊堂建設工事の進展に伴い取り払われた。）

この慰霊堂は、伊東忠太、佐野利器、塚本靖、佐藤功一（以上いずれも工学博士）の設計で、着工昭和三年六月八日、完成昭和五年八月三一日である。

はじめ震災記念堂と称されていたが、昭和二六年九月一日、東京都慰霊堂と改称され、太平洋戦争による都内戦災犠牲者の遺骨もここに安置し、九月一日、三月一〇日の両記念日には、慰霊の大法要が盛大に行われる。

① 復興記念館

慰霊堂の別館として、園内東北隅にあり、総工費二〇万円で昭和五年九月着工、六年四月完成八月開館となった。

関東大震災当時の被災品、絵画、写真、統計及び地震、火災に関する資料や今次太平洋戦争の際の都内の戦災写真や遺留品などを合わせ整理保管し、陳列した博物館である。

② 鐘楼堂

園内東南の事務所わきにあって、弔霊鐘がかかっている。この梵鐘は関東大震災による遭難者の霊を追弔するため、当時の中華民国仏教徒から大正一四年一〇月、日本仏教連合会を経て、東京市に寄贈されたものである。このため市はこれを被服本廠跡に安置することとし、鐘楼堂の設計を記念堂の設計者である工学博士伊東忠太に委嘱し、その建設は東京震災記念事業協会が行うこととなり、昭和五年六月二日着工、八月三一日完成、一〇月一日盛大な鐘始撞式を挙行した。梵鐘は黄銅造り、高さ一・七〇cm、口径一・二〇cm、重さ一・五トンである。

18　安田庭園（地図4）

汐入の池

所在　墨田区横網一丁目一二番

本園は、もと丹後宮津藩主本庄氏により元禄年間に築造され、隅田川の水を導いた汐入回遊式庭園で、規模は小さいが江戸名園の一つであった。

明治維新後、旧備前岡山藩主池田侯の邸となり、次いで安田善次郎氏の所有となった。氏の没後、大正一一年東京市に寄付されたが、大正一二年の大震火災によりほとんど旧態を失った。その後東京市が復旧に力を尽し、昭和二年七月市民の庭園として開園された。

昭和四二年四月東京都から墨田区に移管になったが、戦後の隅田川の汚濁により、池は汚れ、公害等の影響で樹木は立枯れるなど名園としての面影が失われつつあった。区において汐入りの池の再現、樹木の植栽、修景、施設の手入れなど、その全面的改修工事を行い、昭和四六年五月名

園といわれた往時の姿を復元したものである。

○駒止石・駒止銀杏・駒止井戸

寛永九年の初夏のある日、関東一円は暴風雨に襲われた。隅田川の対岸は濁流うづまきすさまじい光景。これをみた将軍家光は、対岸の住民の安否を心配して、家来に対岸の様子を視察せよと命じたが、さすがに誰一人としていくものはなかった。この時、さっとばかりに隅田川に馬を乗り入れたのは、阿部豊後守である、見事に川を渡り大任を果したが、この時川を渡った豊後守が馬をつなぎ一息した所が、この駒止石であり、駒止銀杏、駒止井戸だという。

19　野見宿弥神社（地図4）

所在　墨田区亀沢二丁目八番

明治一八年に創建された。もと同神社の東側に初代高砂の部屋があったとき、高砂浦五郎の尽力で、元津軽家の屋敷跡に相撲の神様として野見宿弥を祀った。玉垣の石柱には、力士や相撲関係者の名前が刻まれており、いかにも角界の信仰する神社であることを思わせる。

○歴代横綱の石碑

昭和二七年一一月、日本相撲協会によって歴代横綱の名を刻んだ石碑が二基建てられ、一基は初代明石志賀之助から四六代朝汐太郎まで、もう一基は四七代柏戸剛から五五代北の湖敏満までの名が刻まれ、さらに、追記できるようになっている。

20 回向院（地図4）

所在　墨田区両国二丁目八番

江戸の町五〇〇余町を焼失し、一〇万人を越える死者を生じたという明暦三年（一六五七）正月の大火後、その月の二四日に芝増上寺に会津少将保科正之の将軍代参があった。帰途正之は数多くの横死者のあるのを見て、そのさまを将軍家に伝えた。その結果、本所牛島新田の地五〇間四方が下付され、貴賤の別なく死者を埋葬した。これが回向院である。

幕府は安藤右京進、松平出雲守の両人を奉行とし、増上寺の遵誉上人に命じて追善の法要を行わせ、さらに念仏堂や庫裡などを建立して常念仏勧行が行われた。森蓮社遵誉貴屋上人はこれを回向院と号し、また小石川智光寺の楽蓮社信誉上人貞存和尚を移住させたので、以後堂舎もしだいに建立されて寺院としての形を整えるようになった。

回向院にはその後、幕府および江戸市民がすべての無縁仏を埋葬するようになり、洪水のために隅田川を漂流する水死者は両国橋あたりで引き上げ、江戸大火によって生じた無縁の焼死者も埋葬されたほか、牢病死の者もここに葬るならわしであった。なお、関東大震災による焼死者の遺骨も分骨して一部納骨されている。

大震災以前の回向院は、表門は素木造りで西に向かっており、山号を記した金字額がかけられ

門内の北側にはすもう茶屋が建ち並び、正面には瓦ぶき素木造りの本堂があったほか、土蔵造りの観世音堂、小銅仏、小祠堂などがあった。

① 加藤千蔭の墓（都指定旧跡）

大岡越前守配下の与力、加藤枝直の子で、字は徳与丸とも常世丸ともいい、通称は又左衛門、芳宜園（はぎその）と号した。

六才で賀茂真渕に師事、国学を学び、村田春海とともに門下の双璧と称せられた。父の没後与力の職を継いだが、その後病の故公職を辞し、国学に専念し、千蔭大人（うし）と尊称されるようになった。著書には、「万葉集略解（りゃくげ）」「うけらが花」などがある。

文化五年九月二日、七二才で没した。墓石が古く磨滅しているので、文字は読みにくい。

② 山東京伝・山東京山の墓（都指定旧跡）

本姓は岩瀬氏、紅葉山（江戸城内）の東に住んでいたので、山東と名乗った。幼名は甚太郎、のち伝蔵、また名を醒、字を酉星と改めた。

父は伝左衛門信明といい、深川木場の質屋伊勢屋に奉公、のち養子となったが、妻子をつれて養家を去り、京橋二丁目の役人となる。京橋に住む伝蔵で、友人が約して京伝と呼んだのをそのまま雅号にしたという。

青年時代に長唄、絵画を学び、吉原にしばしば出入し、家にあるのは月に五、六日にすぎなかったとも言われている。一八才で黄表紙「開帳利益札遊会」を発表したのをはじめに、洒落本、滑稽本などをつぎつぎ世に出した。

父伝左衛門の死後、家業の袋物商に従事したが、新意匠を案出し繁盛した。後には、奇応丸・読書丸等の売薬も営み、文才だけでなく、理財の才のあることも示した。

京伝は長男、京山は次男であるが、文化一三年（一八一六）九月七日五六才で京伝は没し、京山は安政五年（一八五八）九月二四日九二才の長命で没した。なお、墓は京山が撰文し、自分の墓碑石も五三回の誕生日に自撰自書した。

③ 阿弥陀如来坐像（都指定有形文化財）

本尊の阿弥陀如来坐像は無縁塚上に安置されていたが、元禄一六年（一七〇三）一一月二九日の火災で溶解したため、回向院四世の住僧観誉上人祐鑑和尚が銅仏として再び鋳造したものである。作者は有名な仏師原田左京定宅、鋳物師は俗称釜屋堀の釜屋六右衛門こと太田近江大掾正次で、江戸時代の作品として

は優れている。高さ二八〇㎝、幅一一〇㎝で、宝永二年（一七〇五）四月一五日の銘がある。

④ 水子塚

江戸時代には幕府の鎖国政策などの事情によって国内の人口が飽和状態に達し、半ば公然と堕胎や間引き（生児の圧殺）が行われ、人為的に人口制限した。こうした幼い魂を供養するために寛政五年（一七九三）に時の老中松平定信（白河城主）が建立させたものである。

⑤ 猫塚

文化年間に日本橋に住む時田半次郎という者が貧乏に苦しんでいた時、愛育していたねこが小判をくわえてきて多年の恩に報いた。これを徳とした同家では、ねこの死後、回向院に埋葬し、墓を建てたのが、この猫塚であるという。これには異説もある。

⑥ 鼠小僧次郎吉の墓

天保二年八月、小塚原刑場の露と消えた有名な盗賊、講談・浪曲などでは義賊として扱われている。この墓石の破片を持っていると願いごとがかなうという言い伝えがある。

⑦ 石造明暦大火横死者供養塔（都指定有形民俗文化財）

明暦三年の大火の死者の霊を慰めるために建てられたものである。

21　本所松坂町公園（都指定旧跡）（地図4）

所在　墨田区両国三丁目六番

旧本所松坂町、現在の両国三丁目の吉良家上屋敷は広大で、東西七三間三尺七寸（約一三三・八m）、南北は東側が三四間二尺八寸余（約六二・七m）、西側が三四間四尺八寸（約六三・三m）であって、坪数二五五〇坪（約八四〇〇㎡）と記録されている。

吉良上野介が松平登之助屋敷跡を拝領したのが元禄一四年（一七〇一）九月三日、義士の討入があって後没収されたのが元禄一六年二月四日であるから、吉良家の上屋敷となっていたのは、前後一年半に満たない短期間であった。

屋敷の表門は東側、すなわち両国小学校に面した方にあり、裏門は西側に位置していが、東、西、南の三方は周囲に長屋があり、北の方だけは、本多孫太郎、土屋主税（ちから）の屋敷と地続きとなっていた。建坪は、母屋が三八八坪一合五勺（約一二八〇㎡）であり、長屋は四二六坪（約一四〇〇㎡）に及ぶ。

現在吉良邸跡として残る本所松坂町公園は当時の1/76にすぎないが、地元三丁目町会有志が発起人となって、邸内のいわゆる「吉良の首洗い井戸」を中心に土地を購入し、昭和九年三月東京市に寄付したもので、昭和二五年九月に区に移管された。

公園の周囲は、高家の格式を表わすなまこ壁の長屋門を模した高さ二・一mのコンクリート壁と門がわずかに当時をしのばせている。

なお、毎年一二月一四日、義士討入りの前日には、地元義士会によって、義士祭が盛大に行われている。

—註—高家とは皇室・公卿(くげ)など朝廷幕府との間の諸礼を司る家。

22 要津寺（地図4）

所在　墨田区千歳二丁目一番

臨済宗、京都妙心寺末で、慶安年間（一六四八～五一）に僧東鉄が本郷に創建して東光山乾徳寺と号した。牧野越中守成儀を開基とし、西江和尚を開山とする。その後天和二年に焼失して廃寺となっていたが、元禄四年（一六九一）三月九日、今の地に再興され、寺号を成貞寺と改めた。その地は、牧野家下屋敷のあった所で、成儀の子、成貞が同寺にゆずったものである。これによって成貞を中興開基とする。中興開山は梁伝和尚である。

① 中野撝謙の墓（都指定旧跡）

寛文七年（一六六八）に生まれ、名を継善、字を完翁、通称は善助、撝謙と号した。長崎の人。母は大原氏で、林道栄の妻と姉妹である。

幼い時、父を失ったので、道栄の家に寄寓した。道栄はわが子のようにかわいがり、自ら句読を授け、書法を教えた。撝謙はよく学び、七、八才で経史に通じ、一二、三才で書を能くした。人はその名を呼ばず、林氏の神童と称した。一九才で江戸に学び、程朱の学を修めた。

たまたま篠山侯に才能を認められ、その援助でいっそう学問に励んだ。やがて神田鵜子町に住

み、弟子たちに学問を授けた後、関宿侯牧野氏に仕え、禄一五〇石を賜わり、江戸の藩邸にいたが、享保五年（一七二〇）没した。年五四才。

② 島　男也（おとや）の墓

徳川末期の常陸水戸藩士。故あって浪人となり、大阪に出て生玉の祠前に住み、剣術を教え、有名であった。

万延元年（一八六〇）高橋多一郎が上方に来て男也の家を尋ね、機密を示して反幕の計画をたてようとしたが、幕吏の探索は厳重を極め、ついに多一郎父子は自殺し、男也は捕われて江戸の獄舎に送られ、幾許もなく獄中で没した。

なお、高橋多一郎も水戸藩士で藤田東湖に学び、徳川斉昭の近侍となった。幕府のあり方に批判的で、特に井伊大老の幕政に抗し、種々画策した。

23 弥勒寺（地図4）

所在　墨田区立川一丁目四番

万徳山聖宝院と号し、新義真言宗で京都醍醐の三宝院末である。慶長一五年（一六一〇）に創建され、初め小石川鷹匠町にあったが、幾度か移転した後、元禄二年（一六八九）二月一九日に現在地に移ってきた。

新義真言宗の触頭で、関東四か寺中の一寺として格式があったばかりでなく、江戸市内一二薬師中の第六番としても著名であり、成田山や西新井大師の本寺ともなっている。

本尊薬師如来は僧行基の作と伝えられ、一名を川上薬師という。「文政寺社書上」によれば、この薬師如来像はもと水戸領常陸の国の寺院にあったが、その寺地が水戸黄門によって没収された時に、これを谷川に流したところ、川上に向かって流れたので、以後黄門公の信仰を得て、川上薬師と称されるようになったという。

江戸時代には将軍家から寺領一〇〇石を受け、元禄六年一一月三日に御朱印状を下付されている。

―註―　触頭というのは、徳川幕府が、寺院・社家などの中から特にきめて、官府の命令・布告を伝えさせたもので、権威あるものと考えられる。

① 杉山検校の墓（都指定旧跡）

杉山検校は伊勢の人で、名は和一、父は重政といい、藤堂家に仕えていた。嫡子として慶長一五年（一六一〇）に生まれたが、幼時に失明し、家を義弟重之にゆずり、江戸に出て鍼術を山瀬琢一の門に学んだ。

しかし天性魯鈍のために師の門を追われたが、発憤して相模の江の島弁天の祠に詣でて断食祈願すること七日。満願の夜の夢に神から管と鍼とを授けられて大いに喜び、これを動機に杉山流管鍼（くだばり）を創案した。和一は弟子たちに多くの医書を読ませて、これをすべて暗誦し、さらに京都にいき、鍼術の宗匠入江豊明についてこの道の奥義を究めた。

貞享二年正月（一六八五）、将軍綱吉の病を治療して白銀五〇枚を賞賜された。次いで禄五〇〇石を賜わり、のち三〇〇石を加増された。元禄五年五月関東総検校に挙げられ、綱吉の命を受けて鍼術の再興を図り、鍼治講習所を設けて諸生に教授した。元禄六年には宅地二七〇坪を本所一つ目に受領し、ここで晩年を過した。なお、この地に日頃信仰厚い相模国江島神社を鎮祭した。祭神は市杵島姫命で、もと弁天社と称したが、明治以後江島神社と社名を改めた。同境内の杉山神社は杉山検校をまつった社であり、現在あわせて江島杉山神社という。

なお、杉山検校は元禄七年五月一八日（一六九四）没、八五才。著書「療治大概集」、「選鍼三要集」、「節要集」、これを杉山流三部書という。なお、大正一三年、正五位を追贈された。

隅田川七福神の由来

文化元年に百花園が開園してから、ここに集まる文人墨客たちが園主佐原鞠塢(きくう)が福禄寿を祭っているのを知り、この隅田川の東岸にも七福神がそろわないものかと考え、七福神に縁故をもつ神社仏閣を探し出した。このときどうしても見つからなかったのが寿老人であった。いろいろ考えた末、白鬚神社にまつる白鬚大明神は、白鬚とお名がついている以上、これは白い鬚の老人の神様に違いない。一方の寿老人も長命の老人という意味である。そこで、いかにも江戸人らしい機智を働かせて、白鬚大明神を寿老人とみなし奉り、ここにめでたく七福神がそろい給うた。そんないきさつから隅田川七福神に限って、「寿老人」を「寿老神」と書くのである。

こうして、初春七草の間に七福神を巡り、寿福を祝い、家門繁栄、家業隆盛を願う初詣の行事がはじまったのである。七福神の「七」という数は、陽を表わす奇数であって、古くからめでたい数字とされている。七福とは仏教のことばからでたもので、「仁王護国般若波羅密経」に「七難即滅、七福即生」とあり、室町時代になってことにこの名数をつけて呼ぶことが流行して、七福の語にちなんで「七福神」が選び出された。

もともといずれの神も、みな人に幸福を授ける神であるのに、これを七福神に限定したことは、その頃の時代思潮の影響といわねばなるまい。

隅田川七福神

毘沙門天（威光）	……多　聞　寺	（地図 1-1）
寿老神（寿命）	……白鬚神社	（地図 2-5）
福禄寿（人望）	……向島百花園	（地図 2-6）
弁財天（愛敬）	……長　命　寺	（地図 2-7）
布袋尊（大量）	……弘　福　寺	（地図 2-8）
恵美寿（清廉） 大黒天（有福）	……三囲神社	（地図 2-9）

墨田の史跡ガイド
付隅田川七福神めぐり
昭和五十一年十月三十日発行
編集発行　墨田区教育委員会
社会教育課
墨田区横網一丁目六ノ一
電話（六二六）三一五一

ひきふね自動出納
31 072288

墨田
書庫

.6
区